

## 十二支縁起解釈と所依經典

楠 本 信 道

I 問題の所在 *Abhidharmakośabhāṣya* (AKBh) には、世親が縁起説を提示する上で所依としたと考えられる *Pratītyasamutpādasūtra* (PS)<sup>1)</sup> と呼ばれる經典の存在が知られる。PS とはどのような經典であったのか。以下、諸部派の經典に対する解釈のあり方について探りながら、世親が想定した PS について考察する。なお、有部に属する阿含が現在明らかでないため、以下にそれに対応すると思われるものを挙げることにする。

II 諸部派の所依とする經典・論書 AKBh p.131, l.3 から有部の三世兩重の因果が説明されるが、この箇所から p.137, l.18 までに<sup>2)</sup>、縁起に関わる經典<sup>3)</sup>・論書がいくつか引用される。それらと諸部派の関係をまとめると次のようになる。

(a) 有部の所依經典・論書 (a-1) まず、有部は三世兩重の因果が欲界のブドガラにのみ適応されることを説明するために、*Mahānidānaparyāyasūtra* (MNP) を所依とする<sup>4)</sup>。(a-2) また、有部は縁起の構成要素が三つの生に区分されると解釈するために *Nidānasamyukta* (NS)<sup>5)</sup> 14 に類似する經典を所依とする。AKBh は、經の中に有情数 (*sattvākhyā*) なる縁起だけが世尊によって説かれている理由として、「前生・後生・現生に関する無知を取り除くためである。そして、まさにそれ故、[縁起には] 三 [生] の区分があるのである」と言及するが<sup>6)</sup>、その根拠を、「多聞の聖なる弟子は前生に関して無関心である」云々という NS14 に類似する經典<sup>7)</sup> に求める。(a-3) また、有部は、世尊が主要性に依じて説示すると解釈するために、*Hastipadopamasūtra* (HP) を所依とする<sup>8)</sup>。ここでは、經量部と有部の間で議論が展開されるが、この両者の議論には「經典」に対する經量部と有部の解釈の違いが現れている。經量部は「了義はさらに解説される [必要は] ない」と述べ、それに対して、有部は「[世尊が] 説示しているからといって、すべて [の經典の言葉] が、了義であるというわけではない」と反論する。つまり、經量部は經典を「了義」と見なすが、有部は經典すべてを「了義」とは見なさず解釈するのである。(a-4) また、有部は、『阿毘達磨品類足論』(品類足論) を所依とする<sup>9)</sup>。品類

足論は阿毘達磨の論書であり、有部はこの論書を以て縁起を有為法と捉える。そして、「四種縁起」<sup>10)</sup>のうち三世兩重の因果を意味する段階的な縁起(āvasthika)を世俗とみなす。そして、この後の議論で、有部は經典に説かれるものを「言外の意図を込めたもの(ābhiprāyika)」とし、アビダルマに説かれるものを「明示されているもの(iākṣanika)」とすることが言及される<sup>11)</sup>。このように、有部は三世兩重の因果を成立させるために、MNP や NS14 に類似する經典を直接の所依とし、さらに十二の構成要素が主要性によって説かれることをHPによって説明する。しかし、その三世兩重の因果を、品類足論の定義に基いて「世俗」として位置づける。つまり、有部は、MNP や NS14 に類似する經典を「未了義」と解釈することによって、それらの經典よりも、アビダルマの論書を優先させるのがわかる。

(b) 經量部の所依經典 經量部は有部の説明する三世兩重の因果が五蘊からなる十二の段階であることを否定するために、*Pratītyasamutpādādivibhaṅganirdeśasūtra* (PSĀVNS)<sup>12)</sup> に類似する經典を所依とする。なお、PSĀVNS は經典の名称からも明らかのように ādi と vibhaṅga という二つの部分から成る經典である。經量部は「段階的な縁起が五蘊から成る十二の段階である」云々という有部の説が「無明とは何か。凡そ前生に関する無知である」という PSĀVNS に類似する經典から逸脱すると言う<sup>13)</sup>。

(c) 長老世親と Śrīlāta の所依經典 長老世親と Śrīlāta は經量部の論師と考えられる<sup>14)</sup>。まず、長老世親は、十二の構成要素の中の「取」に非理作意が含意されると解釈するために、*Saṃyuttasapratyayasānidānasūtra* (SH)<sup>15)</sup> を所依とする<sup>16)</sup>。ここで、長老世親は「無明は非理作意を原因とすること」及び「非理作意は無明を原因とすること」を SH から読み込み、それを PS に導入しようとする。一方、Śrīlāta は、長老世親と同様に SH を所依とし、さらに、*Samyuttanikāya* 22, 81 に類似する經典を所依とすることによって、十二の構成要素の中の「触」の時点で非理作意が生ずると解釈する<sup>17)</sup>。長老世親と Śrīlāta は、十二の構成要素のうち無明の原因が PS に示されていないという問題を解決するために、非理作意という要素を導入し、非理作意に縁って無明があり無明に縁って非理作意がある、という循環論法を適用することによって、十二縁起に循環性をもたせようとしたのである。さて、長老世親や Śrīlāta との議論の中で世親が想定した PS について考えたい。世親は、Śrīlāta との議論の後、仏による十二支の説示が完全である理由として、「どのようにして、前世と現世が[結びつけられ]、また、さらに現世と来世が結びつけられるのかというこれだけのことが、ここ [PS] の中で意図されている」と

述べ、それを根拠づけるために「前生・後生・現生に関する無知を取り除くためである、とまさに以前に説かれた」と言及する<sup>18)</sup>。「前生・後生・現生に関する無知を取り除く」という言及は、上述した NS14 に類似する經典と結びつくものである。つまり、この議論で世親が PS と呼んでいる經典は、NS14 に類似する經典であることがわかる。

(d) 化地部の所依經典 化地部は、縁起が無為であると解釈するために「如来が出生されようと出生されまいと、この法性はまさに不動である」<sup>19)</sup> という NS14 もしくは NS17 に類似する經典を所依とする<sup>20)</sup>。この解釈に関して、化地部と世親の解釈が異なる。化地部は、縁起が無為であると解釈する。一方、世親は、無明によって諸行が生ずるという普遍的な真理を示すならばその通りであるが、縁起という何らかの常住な実体があると考えればその通りではないと説明する。

III 世親の所依とする經典 以上、諸部派の經典解釈について見てきたが、AKBh p.139, 122-p.140, 123 では、世親の縁起説が説明される。世親の説明する十二縁起の各構成要素について見ると、諸行が福・非福・不動という三種の業であり、識が六識身であり、受が三種であり、愛が欲愛・色愛・無色愛という三種の愛であり、取が欲取・見取・戒禁取・我語取という四種の取であること等が説明される。この内容は上述した PSĀVNS の内容と一致する。したがって、この箇所では世親が想定している PS は PSĀVNS に類似する經典であると考えられる。

IV 結論 最後に諸部派と世親の所依經典についてまとめる。有部は NS14 に類似する經典等を所依經典とするが、それらよりもアビダルマ論書に優位性を持たせる。経量部は PSĀVNS に類似する經典を所依經典とし、論書を「量」とはせず、經典のみを「量」とする。長老世親と Śrīlāta は SH 等を所依とする。上述した経量部が PSĀVNS に類似する經典を所依經典とし、一方、同じ経量部の論師である長老世親と Śrīlāta が SH を所依經典とすることは、経量部の中で縁起に関して別の經典を所依とする伝統があったことを示している。また、化地部は NS14 もしくは NS17 に類似する經典を所依とし、縁起を無為と考える。そして、世親は、AKBh p.131, 13-p.137, 118 の議論では、有部の立場に立って NS14 に類似する經典を所依とするが、AKBh p.139, 122-p.140, 123 の議論では、経量部の立場に立って PSĀVNS に類似する經典を所依とする。このように、AKBh で世親が想定した PS は以上の二つの經典である可能性があり、世親自身が意図したのは後者の經典であったと言える。

- 1) AKBh では *Pratītyasamutpādasūtra* という語は明言されないが, *Abhidharmakośavyākhyā* (Wogihara ed.) p.289, l. 1, p.290, l. 12,17,18,26,32, 等で言及される.
- 2) 今回の議論では, AKBh p.137,l.18-139,l.21 で扱われる「縁起の語義解釈」については除いた.
- 3) AKBh に引用される經典については, 本庄良文 [1991] 「シャマタデーヴァの傳へる阿含資料—世品 (4) [25] - [49] —」『教育諸学研究論文集』(神戸女子大学教育学科研究会) 5, 本庄 [1992] 「シャマタデーヴァの伝える阿含資料—世品 (6) [51] - [75] —」『佛教研究』21 参照.
- 4) AKBh p.131, ll.9-14.
- 5) NS のストロ番号の順については Tripāthi [1962] (*Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamyukta*, Berlin.) に従った.
- 6) AKBh p.133, ll.16-21.
- 7) Tripāthi [1962] pp.150-151. 「後生・現生」についても同様に言及される.
- 8) AKBh p.136, ll.18-21.
- 9) AKBh p.133, ll.7-8.
- 10) 四種縁起については, 拙稿「有部の四種縁起」(『哲学』51,1999, pp.33-46) 参照.
- 11) AKBh p.133, ll.13-16.
- 12) PSĀVNS は NS16 に対応する (Tripāthi [1962] pp.157-164.). なお, PSĀVNS の註釈書 *Pratītyasamutpādavyākhyā* については, 室寺義仁 [1993] 「ヴァスパンドゥによるアラーヤ識概念の受容とその応用」『高野山大学論叢』28, 松田和信 [1982] 「『分別縁起初勝法門經 (ĀVVS) — 経量部世親の縁起説 —」『仏教学セミナー』36 参照.
- 13) AKBh p.136, ll.14-18.
- 14) 福田塚 [1998] (「上座世親と古師世親」『同朋大学論叢』78) p.65 は長老世親及びシュリーラータが「譬喩者／経量部論師」であると指摘する.
- 15) 長老世親と Śrīlāta が SH を所依經典とすることについては, Mejer [1997] “On Vasubandhu's *Pratītyasamutpādavyākhyā*” 参照. なお, SH の和訳については松田 [1984] 「縁起にかんする『雑阿含』の三經典」『佛教研究』14, 本庄 [1991] 参照.
- 16) AKBh p.135, ll.6-7.
- 17) AKBh p.135, ll.10-13.
- 18) AKBh p.135, l.20-136, l.2.
- 19) この言及は, Upāyikā に従えば NS17 に類似する經典からの引用とされるが, 全く同じ文言が NS 14 にも見られるから, 「NS 14 もしくは NS 17 に類似する經典」と解した.
- 20) AKBh p.137, ll.14-16.

〈キーワード〉 Abhidharmakośabhāṣya, Pratītyasamutpādasūtra, 世親

(広島大学大学院)